

怪力

泉鏡太郎

青空文庫

いづれが前に出来たか、穿鑿に及ばぬが、怪力の盲人の
 物語りが二ツある。同じ話の型が變つて、一ツは講釈師が板
 にかけて、のんくづいくと顯はす。一ツは好事家の随筆に、
 物凄くも又恐ろしく記される。浅く案ずるに、此の随筆から
 取つて講釈に仕組んで演ずるのであらうと思ふが、書いた方
 を読むと、嘘らしいが魅せられて事実に聞こえる。それから講
 釈の方を見ると、真らしいけれども考えさせず直に嘘だと分る。
 最も上手が演ずるのを聞いたら、話の呼吸と、声の調子で、客
 をうまく引入れるかも知れぬが、こゝでは随筆に文章で書
 いたのと、筆記本に言語のまゝ記したものとを比較して、おな

じ言葉ながら、其の力が文字に映じて、如何に相違があるかを御覧に入れやう。一ツは武勇談で、一つは怪談。

先づ講釈筆記の武勇談の方から一寸抜き取る。——最も略筋、あとで物語の主題とも言ふべき処を、較べて見ませう。

で、主題と云ふのは、其の怪力の按摩と、大力無双の大將が、しつぺい張くら、をすると云ふので。講釈の方

は越前国一条ヶ谷朝倉左衛門尉義景十八人の侍大將の中に、黒坂備中守と云ふ、これは私の隣国。随

筆の方は、奥州会津に諏訪越中と云ふ大力の人ありて、これは宙外さんの猪苗代から、山道三里だから面白い。

処ところで、此この随筆ずあひつが出しゅつ処つしよだとすると、何なんのために、奥州おうしゅう
 を越ゑちぜん前まへへ移うつして、越ゑちゅう中ちゅうを備びつちゅう中ちゅうにかへたらう、ソレ或あるひは越ゑち
つちうふんどうしひつ中ちゅうは禪ぜんに響ひびいて、強がうりき力りきの威ゐげん嚴げんを傷きづつ
 かも計はかられぬ。——串じやうだん戲げはよして、些ささい細さいな事ことではあるが、お
 なじ事ことでも、こゝは大力だいらきが可いい。強がうりき力りき、と云いふと、九段だんざ坂か
 をエンヤラヤに聞きこえて響ひびが悪わるい。
 最もつとも随筆ずあひつの方ほうでは唯ただ、大だいらき力りきの人ひとあり、としただけを、講かうし
やく釈しゃくには恁かうしてある。

(これは越ゑちぜん前ぜん名な代だいの強がうりき力りき、あるひかりくら
 ひ、持もてる鎗やりは熊くまのためにに喰く折ひられ已やむ事ことを得えず鉄てつ拳けんをあげて
 熊くまをば一けん拳けんの下もとに打うち殺ころしこの勇ゆうりよく力りきはかくの如ごとくであると其そ

くまかは うまじるし
 の熊の皮を馬標とした。）

とおほかんばん
 と大看板を上げたが、最う此の辺から些と怪しく成る。此の備

つちう、あるときゑちぜん
 中、一時越前の領土巡検の役を、主人義景より承

り、供方二十人ばかりを連れて、領分の民の状態を察

せんため、名だゝる越前の大川、足羽川のほとりにかゝる。

ながあめ
 ト長雨のあとで、水勢どうくとして、渦を巻いて流れ、蛇

ごうごう
 籠も動く、とある。備中馬を立てゝ、

すこぶみづ
 「頗る水だな。」

ぎよい
 「御意、」と一同川岸に休息する。向ふ岸へのそくと出

きて来たものがあつた。

さきたま
 (尖へ玉のついた長杖を突き、草色、石持の衣類、小倉の

帯おびを胸むな高たかで、身みの丈たけ六尺しやくあまりもあらうかと云いふ、大おほき盲まう人じん）

——と云いふのであるが、角かく帯おびを胸むな高たかで草くさ色いろの布ぬ子のこと来きては、六尺しやくあまりの大おほき盲まう人じんとは何どうも見みえぬ。宇う都つ谷や峠たふげを、とぼくと行ゆく小こ按あん摩まらしい。

——此この按あん摩まつ杖ちからを力かに、川かはべりの水みづ除よけ堤づゝへ来くると、杖つゑの先さきへ両りやう手てをかけて、ズイと腰こしを伸のばし、耳み欵そて、考かんえて居ゐる様やう子す、

——と云いふ。

これは可いい。如い何かにも按あん摩まが川かは岸ぎしに立たつて瀬せをうかゞうやうに見みえる、が、尋たゞ常じょうの按あん摩まと違ちがひがない。

上かみ下しも何なん百びやく文もんを論ろんずるのぢやない、怪くわ力わりきを写うつす優い劣れつを云いふのである。

出水でみづだ危あぶない、と人々ひと／＼此方こなたの岸きしから呼よばつたが、強情がうじやう
 にもものともしないで、下駄げたを脱ぬぐと杖つゑを通とほし、帯おびを解といて素裸すはだか
 で、ざぶくと涉わたりかける。呆あきれ果はて、眺ながめて居みると、やがて浅あさ
ところこしあたりふかところちうへい処とで腰こしの辺あたり、深ふかい処ところは乳ちうの上うへになる。最もつとも激げき流りう矢やを流ながす。川かは
ぶんめの七分目きへ来きた処ところに、大おほい巖はが一つ水みづを堰せいて龍虎りうこを躍おどらす。按あ
んまはまへ摩巖まの前にフト留とまつて、少しばらくこくび時かたむ小首かたむを傾かたむけたが、すぐふんどしつゑに禪ぜんへ杖じやう
 をさした。手唾てつばをかけて、や、曳えい、と圧おしはじめ、ヨイシヨ、ア
 リヤくく、ザブーンと転ころがす。
 備中びつちうおどろたん驚おどろき嘆たんじ、無事ぶじに涉わたり果はてた按摩あんまを、床几しやうぎに近ちかう召寄めしよ
 せて、
 「あつぱれ、其その方ほう、水みづにせかる、大巖おほいはを流ながれさか逆らひ押おし転ころば

す、凡そ如何ばかりの力があるな。」

すると按摩が我ながら我が力のほどを、自から試みた事がないと言ふ。

「汝音にも聞きつらん、予は白山の狩倉に、大熊を撲殺した黒坂備中、此の方も未だ自分に力を試さん、いざふれ汝と力競べをして見やうか。」

「へへへ、恐れながら御意にまかせ、早速おん対手」と按摩が云ふ。

さて、招魂社の観世物で、墨のなすりくらするのでないから、盲人と相撲もいかなもの。

「シツペイの打くらをいたさうかの。」

「へへへ、おもしろうござります。」

「勝つたら、御褒美に銀二枚。汝負けたら按摩をいたせ、」と此
 処で約束が出来て、さて、シツペイの打くらと成る。

「まづ、御前様。」

「心得た。」

「へへへへ」

と出した腕が松の樹同然、針金のやうな毛がスクスク見える。
 「参るぞ。」

うん、と備中、鼻臍を引いた——とある。

宜いか按摩、と呼ばつて、備中守、指のしなへでウーン
 と打つたが、一向に感じた様子がない。さすがに紫色に成

つた手首を、按摩は擦らうとせず、

「ハ、ハ、蕨が触つた。」

は、強情不敵な奴。さて、入替つて按摩がシツペイの番と成ると、先づ以つて盆の払にありつきました、と白銀二枚頂戴の事に極めてかゝつて、

「さあ、殿様お手を。」

と言ふ。其処で渋りながら備中守の差出す腕を、片手で握添へて、大根おろしにズイと扱く。とえ、擦つたい処の騒ぎか。最う其だけで痺れるばかり。いや、此の勢で、的面にシツペイを遣られた日には、熊を挫いだ腕も碎けやう。按摩爾時鼻脂で、

「はい御免。」

ト傍に控へた備中の家来、サソクに南蛮鉄の鐙を取つて、中
を遮つて出した途端に、ピシリと張つた。

「アイタタ。」

と按摩さすがに怯む。備中苦笑ひをして、

「力は其だけかな、さてく思つたほどでもない。」

と負惜みを言つたものゝ、家来どもと顔を見合はせて、舌を巻
いたも道理。鐙の真中が其のシツペイのために凹んで居た——
と言ふのが講釈の分である。

さて此の趣で見ると、最初から按摩の様子に、迎も南蛮鉄
の鐙の面を指で張窪ますほどの力がない。以前激流に逆つて、

だいせき ころろ 大石を転ばして人助けのためにしたと言ふのも、第一、かち
 わたりをすべき川でないから石があるのが、然まで諸人の難儀
 とも思はれぬ。往来に穴があるのとは訳が違ふ。
 ところ ずあひつ 処で、随筆に書いた方は、初手から筆者の用意が深い。こ
 れは前にも一寸言つた。——奥州会津に諏訪越中と云ふ大力
 の人あり。或一年春の末つ方遠乗かた／＼白岩の塔を見
 物に、割籠吸筒取持たせ。——で、民情視察、巡見
 でないのが先づ嬉しい。——供二人三人召連れ春風と言ふ遠が
 けの馬に乗り、塔のあたりに至り、岩窟堂の虚空蔵にて酒を
 のむ——とある。古武士が野がけの風情も興あり。——帰路に闇
 みがはばしとほ 川橋を通りけるに、橋姫の宮のほとりにて、丈高くしたゝか

なる座頭ざとうの坊ぼう、——としてあるが、宇都谷峠うつのやたふげとは雲泥うんでいの相違さいうゐ、

此このしたゝかなるとばかりでも一寸ちよいとあぶみくぼ鐙ぢやうは窪くぼませられる。座頭ざとう、

琵琶箱びはばこを負おひて、がたりびしりと欄干らんかんを探さぐり居ゐたり。——琵琶びは

箱ばこ負おひたる丈たはたか高たかきしたゝかな座頭ざとう一人ひとり、人ひと通とほりもなき閼川橋やみがはぼし

の欄干らんかんを、杖つゑ以もてがたりびしりと探さぐる——其その頭上づじやうには怪あやし

き雲くものむらくとかゝるのが自然しぜんと見みえる。分わけて爰こゝに、がたり

びしりは、文章ぶんしやうの冴さえで、杖つゑの音おとが物もの凄すごく耳みみに響ひびく。なか／

＼口くちで言いつても此この味あじは声こゑに出だせぬ。

また此この様やう子すを見みては、誰たれも怪あやしまずには居ゐられない。——越ゑつち

中馬うちまを控ひかへ、坐頭ざとうの坊何ぼうなにをする、と言いふ。坐頭ざとう聞きいて、此この橋はし

は昔聖徳太子むかしやうとくたいしの日本にっぽん六十余州よしうへ百八十の橋はしを御掛おかけなされ

し其の内にて候よし伝へうけたまはり候、誠にて候や、と言ふ。

成程それなりと言ふ。

座頭申すやう、吾等去年、音にきゝし信濃なる彼の木曾の

掛橋を通り申すに、橋杭立ち申さず、谷より谷へ掛渡しの

鉄の鎖にて繋ぎ置き申候。其の木曾の掛橋と景色は同じ

事ながら、此の橋の風景には歌よむ人もなきやらむ。木曾の橋

をば西行法師の春花の盛に通り給ひて、

生ひすがふ谷のこずゑをくもにて

散らぬ花ふむ木曾のかけ橋

また源の頼光、中納言維仲卿の御息女を恋ひさせ給ひて、

恋染し木曾路の橋も年経なば

なか
中もや絶えて落ぞしぬめり

此のほか色々いろくの歌も侍るよし承り候と言ふ。——此の物このものがた

語、優美の中にいうびうち幻げんくわい怪あり。六十余州往來する魔物の風まものふうり

流思ふべく、はた是これあるがために、闇川橋のあたり、山聳え、うおも

花深く、路幽みちゆうに、水疾みづはやき風情見るが如く、且つ能樂のうがくに於ける、

前シまへテと云ふ段取だんどりにも成る。

越中えつちゆうつく／＼聞きいて、見みかけは弁慶べんけいとも言ふべき人柄ひとがら

なれども心だての殊しゆしゆう勝かちさは、喜撰法師きせんはふしにも劣るまじと誉め、おと

それより道みちづれして、野寺のでらの觀音堂くわんおんだうへ近ちかくなりて、座頭ざと傍かたはらの

石いしに躓つまづきて、うつぶしに倒たふれけるが——と本文ほんもんにある処ところ、講かうし

釈やくの即すなはち足羽川あすはがは中流ちゆうりゆうの石いしなのであるが、比較ひかくして言いふまで

もなく、此の方が自然で、且つ変化の此の座頭だけに、観音くわんおんだ
 堂うに近い処で、躓ちかところき倒れたと云つまづたふへば、何なにとなく秘密ひみつの約束やくそくが
 あつて、ゾツとさせる。——座頭ざとうむくと起おきなほ直つて、腹はらを立て、
みちばた道端みちばたにあつて往來わうらいの障さまたげなりと、二三十人にんばかりにても動かし
 がたき大石だいせきの角かどに手をかけ、曳えいやつといふて引起ひきおこし、目めより
たか高くさし上げ、谷底たにそこへ投落なげおとす。——いかにも是これならば投なげら
 れる、——越ゑつちう中ちゆうこれを見て胆みを消きし、——とあつて、
 「さてく御座頭おざとうは大力だいきかな、我も少し力ちからあり、何なんと慰なぐさみなが
ちからくらべら力競ちからせまじきか。」
 と言いふ。我われも少し力ちからありて、やわか座頭ざとうに劣おとるまじい大力だいきのほ
 どが想おもはれる。自みづから熊くまを張殺はりころしたと名乗なるのと、どちらが点う

首なづかれるかは論ろんに及およばぬ。

座頭ざとうき聞いて、

「御慰おなぐさみになるべくは御相手おあいで仕かまつるべし。」

と言いふ。其処そこで、野寺のでらの觀音堂くわんおんだうの拜殿はいでんへ上あがり、其方そなた盲人まうじん

にて角觥すまうは成なるまじ、腕うでおしか頭あたまはりくらか此この二ふたつの中うちにせむ。

座頭ざとうまを申まをすは、然しからばしつпей張競はりくらを仕つかまつり候さふらはんまゝ、我わが

天窓あたまを御張おんはり候さふらへと云いふ。越中ゑつちうしか然しからばうけ候さふらへとて、座頭ざとうの天

窓たまへしたゝかにしつпейを張はる。座頭ざとう覚おぼえず頭かしらを縮ちぢめ、面おもてを顰ひそめ、

しばし天窓あたまを撫なでゝ、

「さてく強つよき御力おちからかな、そなたは聞き及およびし諏訪越中すはゑつちうな。さ

らば某それがしも慮りよくわい外ひとながら一ひとしつпей仕つかまつらむ、うけて御覽ごらん候さふらへ。」

とて越中ゑつちゆうが頭かしらを撫なで、見み、舌した赤あかくニヤリと笑わらひ、人ひとさし指ゆびに鼻は

油あぶらを引ひて、しつぺい張はらんと齒はがみ嚙かみをなし立たち上あがりし面つらがまへ貌へ――

――と云うんぬん々かく。恁かくてこそ鬼神きじんと勇士ゆうしが力ちから較くらべも壯そう大だいならずや。

越中ゑつちゆう密ひそに立たつて鎧あぶみをはづし、座頭ざとうがしつぺいを鎧あぶみの鼻はなにて受う

くる。座頭ざとう乗のりかけ声こゑをかけ、

「曳えいや、」

とはつしと張はる。鎧あぶみの雉き子じのまがりめ二ふたツ三みツに張はり碎くだけたり。

「あつ、」

と越中ゑつちゆう、がたり鎧あぶみを投ほうり出だし、馬うまにひらりと乗のるより疾はやく、一いっ散さんに遁にげて行ゆく。座頭ざとう腹はらを立て、

「卑怯なり何処へ遁ぐる。」

と大音あげ、追掛しが忽ちに雲起り、真闇になり、大雨降り出し、稲光烈しく、大風吹くが如くなる音して座頭はいづくに行しやらむ——と言ふのである。前の講釈のと読較べると、彼の按摩が後に侍に取立られたと云ふ話より、此天狗か化物らしい方が、却つて事実に見えるのが面白い。

青空文庫情報

底本：「新編 泉鏡花集 第十卷」岩波書店

2004（平成16）年4月23日第1刷発行

底本の親本：「桜草」文芸書院

1913（大正2）年3月18日

初出：「新小説 第十四年第六卷―第十四年第七卷」春陽堂

1909（明治42）年6月1日―7月1日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「怪力《くわいりき》」となっています。

※初出時の署名は「泉鏡花」です。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2016年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

怪力

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>